美術教育学の制度的基盤の成立過程
－山口大学における人的制度と配置－

有田　洋子*

Yoko ARITA

A Historical Research on Establishment of the Staff of Art Education in the College :
The Case of the Faculty of Education of Yamaguchi University

要　　旨

山口大学における美術教育学の制度的基盤の成立過程（人的制度の成立と人的配置）を次のように明らかにした。1．山口師範学校から山口大学教育学部への移行：図画工作担当教官はほぼ大学に移行したが，美術科教育を専門とする教官はいなかった。当然ながら，制度的に美術科教育の専門性は保証されておらず，「美術教育学」も認識されていなかった。2．学科目の設置と具体的人員の配置：昭和45年より美術科教育の学科目に人員が置かれ実質化し，制度的に美術科教育の専門性が保証された。3．教科教育専攻大学院の設置と展開：美術科教育を専門とする二教官が揃い，平成３年４月に教科教育大学院が設置された。これにより，山口大学における美術教育学の制度的基盤が成立した。

【キーワード：美術教育史，美術教育学，学科目，大学院】

１．本稿の目的

本稿筆者は美術教育学の制度的基盤の成立過程を，全国の教員養成大学･学部の人的制度の成立と人的配置の調査から明らかにしようとしている。本稿は，山口大学におけるそれを検証するものである。本研究における問題設定は，既に別稿で述べた[1)]。調査は次の三段階の時期区分に基づいて行う。

1. 戦前の師範学校から戦後の教員養成大学･学部への図画工作担当教官の移行
2. 学科目の設置と具体的人員の配置
3. 教科教育専攻大学院の設置と展開（人員の配置）

考察対象はこの三時期区分に基づき，戦前の師範学校から戦後の教員養成大学･学部への移行期から教科教育大学院の設置までとする。なお，山口県師範学校，山口師範学校，山口大学教育学部における美術関係教官の人的配置表の作成にあたっては，その時期範囲を前後に拡大し，大正15年から平成15年までとした。

２．山口大学における三時期区分の概観

1. 山口師範学校から山口大学教育学部への移行：山口師範学校から山口大学教育学部へ図画工作教官はほぼ移行できた。最初期は美術科教育専門の教官はいなかった。当然ながら制度的に美術科教育の専門性は保証されておらず「美術教育学」も認識されていなかった。
2. 学科目の設置と具体的人員の配置：昭和39年学科目制度発足以後，暫くは，美術科教育を専門に担当する教官の不在が続いた。昭和45年にそれまで書道，工作･工芸，絵画，美術理論･美術史と多様な分野を担当してきた，東京美術学校図画師範科出身の森本宏が美術科教育の学科目の担当教官となる。さらに昭和54年に新たに武市勝が美術科教育の学科目で採用となる。森本の担当移動と武市の赴任により，美術科教育の専門性は，制度的に保証された。
3. 教科教育専攻大学院の設置と展開：昭和62年に岡田匡史，昭和63年に福田隆眞が赴任し，美術科教育を専門とする二教官が揃い，平成３年に教科教育大学院が設置された。山口大学の場合，この時期，美術教育学の制度的な基盤が成立したと言える。

なお山口大学の場合の特徴として，次の二つが挙げられる。第一に，戦前の師範学校時代の図画教官は東京美術学校出身者が多かったが，戦後の図画工作教官は東京高等師範学校･東京教育大学出身者に徐々に変わっていく。第二に，一部の教官に技術講座との所属変更が見られる。

大正15年から平成15年までの，山口県師範学校，山口師範学校，山口青年学校教員養成所，山口青年師範学校，山口大学教育学部における美術関係教官の人的配置を表１に示しておく[2)]。

*　島根大学教育学部芸術表現教育講座

3．各時期区分における様相

(1) 山口師範学校から山口大学教育学部への移行期

①大学への移行期の様相　昭和24年５月，山口高等学校，山口師範学校，山口青年師範学校，山口経済専門学校，宇部工業専門学校，山口県立獣医畜産専門学校を母胎として，山口大学は発足した[3]。発足当初，文理学部，教育学部，経済学部，工学部，農学部が設置された。

教育学部は，山口師範学校男子部(山口市)，山口師範学校女子部(光市･旧熊毛郡室積町)，山口青年師範学校男子部女子部(防府市)を母胎として発足した。他県の青年師範学校では図画は科目そのものが置かれないこともあったが，山口青年師範学校には置かれた。発足当初，山口大学教育学部は，三師範学校を引き継ぎ，山口本校，光分校，防府分校の三校で構成されていた。その後，昭和32年に光分校，昭和35年に防府分校が廃止された。なお大学発足と同時に師範学校は廃止されたわけではなく，師範学校在学生の卒業年まで山口大学山口師範学校･山口大学山口青年師範学校と称し，昭和26年３月まで存続した。大学への移行は徐々に行われた。

山口大学発足時，山口大学設立構想に関する議論は，校関係者というより県主導でことが運ばれたらしい[4]。ただ，師範学校から大学への移行に伴う人事に関する人事調査委員会は昭和23年１月に各師範学校で作られ，大学に移行する際の教官の資格認定は文部省で行われた[5]。昭和24年発足時に教授と決定されたのは三名のみで，大学への教官の移行も徐々に行われた。

山口大学教育学部「図画工作科」[6] の教室は，山口本校と光分校に置かれた。山口市にあった山口師範学校男子部教官は山口本校に，光市にあった山口師範学校女子部教官は光分校に移行した。男子部から山口本校には，昭和24年に徳光正亮(工作)，昭和26年に中田清一(工作)と友近琢男(図画)が移行した。女子部から光分校には，昭和25年に勝見謙信(図画)，昭和26年に森本宏(工作･書道)が移行した。なお防府分校には図画工作科は置かれなかった。山口青年師範学校に梶進(図画)が在職していたが，他校との兼任講師であったためであろう大学へ移行しなかった。梶以前の山口県立青年学校教員養成所時代の図画手工教員も他校との兼任や嘱託であった。

山口師範学校・山口青年師範学校が廃止となり大学への教官の移行が完了した昭和26年の人員構成を以下に示す。

[昭和26年]

山口本校（山口市芳澤町）		出身校	年齢	出身地
助教授	工作　徳光正亮	山師T7文検S5	53歳	山口（山口市）
助教授	工作　中田清一	山師S2文検S12	43歳	山口（吉敷郡）
助教授	絵画　友近琢男	東高師S12	36歳	山口（吉敷郡）
光分校（光市室積町）				
助教授	図画　勝見謙信	東美西S3	49歳	広島
講師	工作　森本宏	東美図師S17	35歳	山口（光市）

参照：山口県教職員組合編『山口県教職員録』昭和26年7月発行。
なお出身地に関しては同職員録昭和23年10月発行を参照した。

男子部から山口本校に移行した三名の教官の略歴を次に示す。

徳光正亮(しょうすけ)(明治31-平成５)は，大正７年３月山口県師範学校本科一部を卒業後，山口県公立小学校訓導を経て，昭和５年７月文部省中等教員検定試験(以下，文検と略記)手工科に合格し，昭和７年９月から山口県師範学校山口本校の訓導兼教諭となる[7]。昭和８年５月から山口県立実業補修学校教員養成所講師も兼任する。師範学校では，昭和７年から15年までは図画と手工を，昭和16年以降は手工･工作を担当した。山口大学教育学部紀要『研究論叢』掲載論文に，「錦窯について」(昭和27)，「中学校工作教室の検討」(昭和29)，「造形表現における児童の実態」(昭和30)，「造形科の評価について」(昭和31)，「楽焼の焼成」(昭和33)，「楽焼用釉薬」(昭和35) 等がある。

中田清一(明治40-昭和49)は，昭和２年山口県師範学校本科一部を卒業後，昭和12年文検に合格し，昭和15年11月山口県師範学校に赴任する[8]。昭和16年は農業，昭和17年は修身と手工，昭和18年以降は工作を担当した。山口大学教育学部紀要『研究論叢』掲載論文に，「焼石膏について」(昭和28)，「逆目切削の一研究」(昭和39)，「釘着の研究」(昭和40)，「山口県下の小学校に於ける視聴覚教育の実態調査」(昭和38)，「中学校技術科教育における視聴覚教材の利用について」(昭和41)等がある。

友近琢男(大正４-平成17)は，山口県師範学校で手工を担当していた田村伝次の次男として山口市に生まれ[9]，東京高等師範学校図画手工科で，中沢弘光，板倉賛治，田原輝夫に師事する[10]。昭和12年３月に同校を卒業し，昭和12年から福岡県女子師範学校に勤務の後，昭和22年山口師範学校山口本校に赴任する。昭和23年は図画工作，昭和24年以後は図画・絵画を担当した。「若いときには団体展に，後は個人展を主とすべきである」という考えの下，それを実行した[11]。

女子部から光分校に移行した二名の略歴を次に示す。

勝見謙信(明治35-昭和63)は，昭和３年３月に東京美術学校西洋画科を卒業し，昭和４もしくは５年から16年まで富山県富山市立高等女学校に勤務の後，昭和16年山口県女子師範学校に赴任する。図画・絵画を担当した。当時山口県内小学校代用教員であった安野光雅は，勝見の薫陶を受け，その教育のあり方を想起させる逸話を残す[12]。

森本宏(大正５-平成５)は，昭和15年に東京美術学校彫刻科修了後，昭和17年９月に東京美術学校図画師範科を卒業する[13]。その卒業直後に東京陸軍航空学校大津分校に，昭和18年に広島陸軍幼年学校に赴任する[14]。昭和22年に山口女子師範学校に赴任する。書道と工作を担当した[15]。

大学設置直前の昭和23年に在職が確認された者のうち移行しなかったのは，三好正直と梶進である。三好は山口大学に移行しなかったものの，その後も山口県の美術界や大学での非常勤講師の活動を通して，山口大学との関わりは続いたと思われる。梶はあくまで他校との兼任講師であったため移行しなかったものと推察する。

三好正直(まさなお)(明治37-昭和60)は，山口県防府市に生まれ，昭和10年３月東京美術学校油画科を卒業する。１年後輩に香月泰男，２年後輩に松田正平がいる。卒業してすぐに南満州撫順高等女学校に勤務する[16]。満州国美術展覧

会委員，満州美術科連盟常任理事，満州芸文連盟委員等も務める。戦後満州より引き揚げた後，山口師範学校に赴任する。その後山口大学教育学部へは移らず，山口の文化行政と関わるなどして，戦後の山口の芸術活動発展の旗手として活躍した。後に，開学時から山口芸術短期大学教授，山口県立美術館初代顧問，山口萩焼作家協会初代会長等を務めた。昭和27年から山口県芸術文化振興奨励賞選考委員長を務め，昭和42年度山口県選奨（芸術文化功労）を受賞した。山口大学教育学部非常勤講師も勤め，また山口大学教官が山口芸術短期大学に非常勤講師として勤める等，山口大学教育学部教官や学生とも交流は続いたようである[17]。

梶進（大正４-平成３）は，東京に生まれ，昭和16年３月東京美術学校油画科卒業後，同年４月城西学園中学校教諭となり，昭和18年より防府海軍通信学校付海軍嘱託に着任し同校の教材作製の指導に従事する。昭和20年終戦と共に海軍嘱託解員となり，逓信省防府無線電信講習所専任講師，昭和23年より教官となるが，同講習所閉所のため退官。同23年山口県立小野田高等学校教諭，翌24年防府北高等学校に転勤。昭和27年３月まで山口県防府市に在住することとなる。その間，昭和23年に山口青年師範学校に兼任講師として勤務する。その後，東京へ戻り教職と画業の両立を続ける。光風会会員，日展会友の洋画家であった[18]。

三好，梶，それから昭和17年に山口師範学校教諭として奉職した松田正平（大正２-平成16）[19] は皆，東京美術学校油画科藤島武二教室の同門であった。

大正15年から昭和24年４月までにおける山口県師範学校･山口師範学校の図画教員は，東京高等師範学校出身の下瀬貞和と友近琢男を除き，東京美術学校出身者で占められたことが特徴的である。西洋画･油画科出身者では，小野信治郎，波多野勝好，勝見謙信，松田正平，三好正直，梶進がいた。図画師範科出身者では，大正15から昭和３年に在職が確認された小林富蔵と，森本宏がいた。

なお，下瀬貞和（別名：幀義）（明治34−昭和58）は，山口県防府市出身，大正11年３月山口県師範学校を卒業後，山口県尋常高等小学校訓導を経て，大正14年３月東京高等師範学校図画手工専修科を卒業し，大正14年３月から昭和４年まで和歌山県師範学校教諭，昭和４年３月から鹿児島県女子師範学校教諭兼訓導及び兼任第二高等女学校教諭，昭和４年頃から鹿児島県第一師範学校にも勤務し，昭和７年９月から昭和15年11月まで奈良女子高等師範学校附属高等女学校教諭兼訓導となる。そして昭和18年４月から昭和20年３月まで山口県女子師範学校に勤務する。その後，福岡教育大学教授，九州産業大学芸術学部長を歴任し，昭和46年から昭和54年まで九州造形短期大学学長を務めた[20]。

以上，山口師範学校から山口大学へ移行した教官の特徴は，次のようにまとめることができる。１.出身地が山口県であること。勝見以外は山口県出身者で占められる。県内出身者を採用することは地方大学に比較的多く見られる。２.山口本校は山口県師範学校縁の人員構成，光分校は東京美術学校出身者による構成であること。山口本校の構成人員は，山口県師範学校出身の徳光と中田，父親が山口県師範学校手工教員であった友近から成る。光分校の構成人員は，東京美術学校西洋科画出身の勝見と同校図画師範科出身の森本から成る。

②大学移行後の展開　さらに大学移行後の展開を見る。他大学では，大学発足直後の人員構成によっては，外部から新たに，学士取得者，旧帝大系教官，東京美術学校出身等の実技の実力者，日展等の当時社会的に認められていた展覧会の実力者等を教授採用等の厚遇で招聘し，研究室は大きく様変わりすることがあった。山口大学の場合，師範学校から移行した教官を中心に，比較的穏やかに進んでいったものと思われる。教官構成は，山口県出身者が多く，山口県師範学校出身で同校へ長年勤務する者，東京美術学校や東京高等師範学校の出身者といった多様な出自の人材が揃ったことも戦後の展開に影響したのかもしれない。昭和28年になると，東京美術学校を卒業した服部碩夫が新たに教官陣に加わるが，大変化というわけではなかったと思われる。服部は山口県出身で，助手で採用され，最初は図画，昭和37･38年はデザイン，昭和39年以降は構成を担当した。

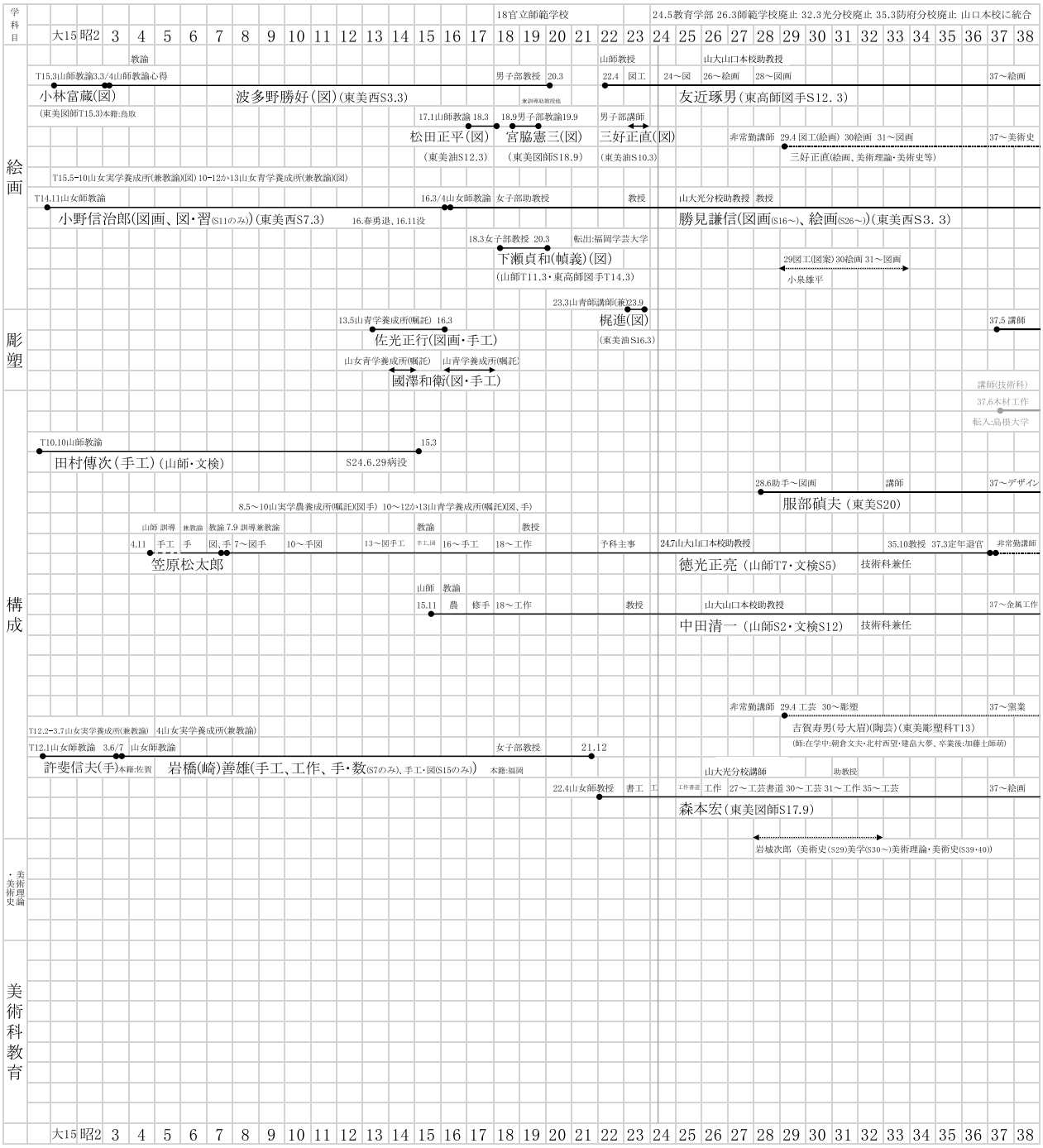
大学移行後に生じた大きな変化としては，一部教官の技術講座への移動があげられる。昭和32年から，徳光が木材加工,中田が金属加工で,職業技術科と兼務することとなる[21]。昭和33年に中学校教科に技術科が出現したための措置である。徳光の論文に「移行期における図画工作教育」[22] があり，当時の徳光の思いが垣間見える。山口大学ではこの技術講座との所属変更がこの後も生じる。先のことではあるが，広島大学教育学部附属学校に勤めていたところ，技術講座の木材加工担当で昭和46年に採用された横山省三が，美術講座に定員が純増となったことにより昭和52年頃，美術講座に所属変更となる。

さらに，昭和37年に伊藤釣が，山口大学初の彫塑の専門教官として赴任する。それまで彫塑は工作･工芸の一部としてその担当教官が指導していたであろう。さらに同年，島根大学教育学部の美術講座で助手をしていた細田育宏が，山口大学教育学部に赴任する。技術講座への着任であり，木材加工を担当した。その後細田は昭和46年に東京学芸大学の美術講座に転出する。

なお，伊藤も細田も，さらに昭和40年に赴任する絵画の山本文彦も皆東京教育大学出身者であった。それぞれ昭和46年に細田が東京学芸大学に，昭和49年に伊藤が筑波大学に転出する。山本も昭和48年退任後，神戸大学を経て筑波大学へ異動する。その後も，絵画の秋山泉，彫塑の川口政宏，構成の横山省三，教科教育の武市勝，福田隆眞，岡田匡史と，東京教育大学･筑波大学出身者が続く。

また，もう一つ山口大学におけるこの時期の特異な事象として，森本宏が多様な分野を担当することが挙げられる。師範学校勤務時代から大学移行後数年は書道と工作･工芸を，その後は工芸一本となり，学科目制度発足直前には絵画を担当する。さらにその後も多様な分野を担当していく。

表1



山口師範学校時代の人員構成

[昭和23年]

山口師範学校男子部(山口市芳澤町)

教授 工 徳光正亮

教授 工 中田清一

教授 図・工 友近琢男

山口師範学校女子部(光市室積町)

教授 図 勝見謙信

教授 書・工 森本宏

講師 図 三好正直

山口青年師範学校(防府市)

兼講師 図 梶進

山口大学発足直後の人員構成

[昭和24年6月以前]

山口本校(山口市芳澤町)

文部教官 工 徳光正亮

文部教官 工 中田清一

文部教官 図 友近琢男

光分校(光市室積町)

文部教官 図 勝見謙信

文部教官 工 森本宏

[昭和25年]

山口本校(山口市芳澤町)

助教授 工 徳光正亮

旧制山口師範学校

教授 工 徳光正亮

教官 工 中田清一

教官 図 友近琢男

光分校(光市室積町)

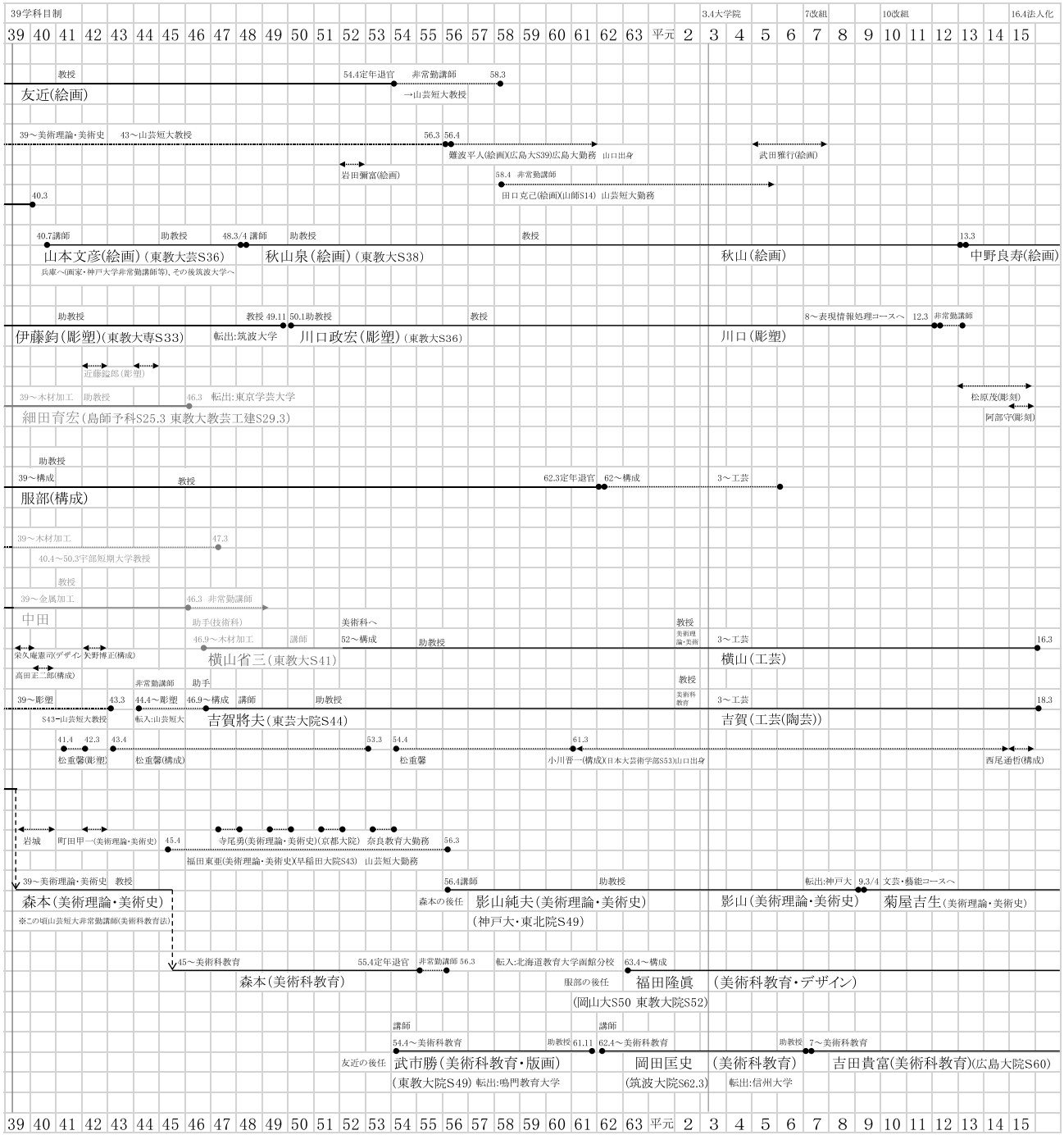
助教授 図画 勝見謙信

旧制山口師範学校女子部

教官 図画 勝見謙信

教官 工作書道 森本宏

※上記人員構成は山口県教職員組合編『山口県教職員録』(昭和23年10月, 昭和24年10月, 昭和25年7月発行)によって作成。



凡例

○横の実線は在職期間を示す。点線(┈┈)は非常勤講師としての在職期間，破線(- - -)は附属校在職期間を示す。

○横の線の両端の数字が就任と退任の年月を表す。

○横の線の端が黒丸の場合は就任あるいは退任の年(月)が明確であることを示す。横の線の端が矢印の場合はその時点までの勤務が確実であることを示す。

○横の線の上部には職位とその就任年月を示す。平成 25 年現在在職教員に関しては示さないことを原則とする。

○職位の左もしくは下に就任年月が示されていないものは，その年度の職員録に記された職位を示したものである。そのため現実にはそれより以前の就任である可能性がある。

○横線の上部にその年度の職員録に記された担当分野を示す。あくまでも書類上のもので，現実にはこれと異なる可能性もある(昭和 25 年までは『山口県学事関係職員録』『山口県教職員録』，昭和 26 年からは『山口大学職員録』を参照。なお，大学院での担当分野の記載は見られず，学部のもののみを示す)。

○後任者が前任者転退任年と同年の次月以降に就任した場合，その月の境を斜線(/)で示す。

○人名の後の括弧内には学科目ないし担当分野を示す。さらにその後に，修学校名の略記と卒業あるいは修了年月を示す。

○灰色の文字及び線は，所属が技術科であることを示す。

○大学院の人員，及び副手，技能補佐員は示していない。

○修学校の略記は以下のように行う。山大：山口大学。山師：山口県師範学校(昭和 17 年以前)。山口師範学校(昭和 18 年以降)。 山女師：山口県女子師範学校。 山青師：山口青年師範学校。男子部：山口師範学校男子部。女子部：山口師範学校女子部。山実学農養成所：山口県立実業補習学校農業科教員養成所。山青学養成所：山口県立青年学校教員養成所。山女実学養成所：山口県立女子実業補修学校教員養成所。山女青学養成所：山口県立女子青年学校教員養成所。山青師：山口青年師範学校。文検：文部省中等学校教員検定試験。東美校図師：東京美術学校図画師範科。東芸大：東京芸術大学。東高師図手：東京高等師範学校図画手工専修科。東教大：東京教育大学。山芸短大：山口芸術短期大学。

③この時期の教科教育関係授業　この時期の山口大学には，美術科教育専門の担当教官は不在であった。この時期の教科教育関係授業の担当者を明示した資料を確認することはできなかった。この時期の多くの他大学でもそうであったように，だれが担当するかの絶対的な決まりはなく，その時の状況に応じて，分担あるいは特定の教官に任せることとしたのであろう。

①②③に分けて見てきたが，山口師範学校から山口大学移行期において，美術科教育を専門に担当するあるいは研究内容とする教官はいなかった。「美術教育学」というものは認識されていなかった。山口大学の場合の特徴として，大学へ移行した教官には出身地が山口県で，山口本校･光分校が存在していた時期は各校ごとに出身学校等による人員構成の傾向がうかがえた。大学移行後の展開は，美術講座内においては比較的落ち着いて進んでいったであろうことが推察された。また，大学移行後の特徴として，一部教官の技術講座への移動があったこと，教官構成に関して，師範学校時代は東京美術学校出身者が多く，移行直後は多様となり，その後は東京高等師範学校・東京教育大学・筑波大学出身者が多くを占めるようになってきたことが挙げられる。

(2) 学科目の設置と具体的人員の配置

昭和39年2月に「国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令」が定められ[23]，教員養成大学･学部の美術講座に，絵画，彫塑，構成，美術理論･美術史，美術科教育を基本とする学科目が置かれることとなる。いわゆる学科目制度の発足である。それまでの美術講座では，図画と工作あるいは美術と工芸といった漠然とした区分けが多かったが，学科目制度を機に教官の専門性が明確化していくこととなる。示される学科目は大学によって若干異なり，まず前年の昭和38年に，文部省から各大学に学科目案の照会があった後，昭和39年２月に同省令，同年４月に同省令の改正が定められた。同省令及び改正省令によると山口大学には，絵画，彫塑，構成，美術理論･美術史，美術科教育が示された[24]。

学科目制度に備えてか，その発足前年の昭和37年，職員録の表記において，一部教官の専門分野の呼称及び内容に次のような変更が見られた。友近は図画から絵画，中田は工作から金属工作，服部は図画からデザイン，森本は工芸から絵画となった。なお中田は昭和39年の『山口大学職員録』から，技術講座の「金属加工」担当として記載されている。それまで兼任であった技術講座へ専任として移動したと思われる。

学科目制度発足後の昭和39年度は，絵画：勝美・友近，彫塑：伊藤，構成：服部，美術理論･美術史：森本となる。美術科教育の学科目は，学科目制度発足後も暫く担当者不在で，昭和45年，森本が担当を移ることで初めて実質化する。森本は就任以来，書道，工作･工芸，絵画，美術理論･美術史，美術科教育と多様な分野を担当してきた。図画工作に関することなら何でもできるとされた図画師範科出身者らしい様相とも言える。また森本はその頃，昭和43年開学当初から山口芸術短期大学に非常勤講師で勤め，昭和44年から昭和53年まで美術科教育法を担当していた[25]。

その後，昭和54年に絵画の友近が定年退官を迎え，その後任として，美術科教育の学科目担当者を採用することとなり，東京教育大学の出身である武市勝が採用される[26]。武市は美術科教育と共に版画も専門とした。版画作品及び版画に関する論文も多数ある。昭和61年に鳴門教育大学に転出となり，現在も版画教育者・版画作家として活躍する。

以上のように，森本の担当学科目の移動，武市の赴任によって，山口大学において制度上は美術教育学の人的整備が確定された。

(3) 教科教育専攻大学院の設置と展開

平成３年４月に山口大学大学院教育学研究科が設置される。美術教育専攻は第一陣として同年に開設された。大学院を設置するには教官の資格審査があり，この時期，全国的に教官の異動や専門分野の移動等が多数あった。特に，大学院設置要件の教科教育㊀教官１名，合教官１名は，当時その業績を満たす研究者が限られたため揃えるのが大変であった。山口大学の場合，大学院設置に向けて，美術科教育プロパー教官を新たに二名採用することとなる。

院設置を目前にして，昭和62年に筑波大学大学院博士課程で美術論･芸術教育学を研究していた岡田匡史が,翌63年には北海道教育大学函館分校から福田隆眞が採用される[27]。岡田は，昭和61年に転出した武市の後任としての採用であった[28]。福田は，構成の服部の後任としての採用で[29]，そのため大学院では美術科教育，学部では構成を指導した。岡田と福田の着任により，教科教育二教官が揃い，助教授の福田が㊀教官，講師の岡田が合教官として大学院設置の資格審査を通る。この時期，福田と岡田は非常に多くの論文や著書を発表している。福田はこの時37歳の若さであり，しかも㊀助教授というのは全国的に稀なことであった。以上のように，山口大学においては，福田と岡田の赴任により，制度的に美術教育学が自立したと言えよう。

なお，山口大学大学院教育学研究科美術教育専攻全体としては，絵画：秋山泉，彫塑：川口政宏，工芸：吉賀將夫(はたお)(陶芸)･横山省三(木工)，美術理論･美術史：影山純夫，美術科教育：福田隆眞・岡田匡史でスタートする。大学院設置の頃，実技教官も論文を発表している。大学院設置に際して示唆されるらしい文部省によるコンセプトは，山口大学の場合，実技教官にも論文を求めるものであったのかもしれない。なお，大学院が設置された平成３年発行の『山口県教職員録』では吉賀將夫を「美術科教育・工芸」，平成２年発行の『山口大学職員録』では「美術科教育」とするが，教授定員のあった美術科教育の枠を用いたことによる便宜的なもので，吉賀は陶芸一本を専門とした萩焼の陶芸家であった。

その後の学部に関する展開を少し示しておく。平成元年行われた改組により設置されたいわゆるゼロ免課程の総合文化教育課程情報科学教育コースが，平成８年の大学改革に伴って表現情報処理コースと改められ，そこに美術講座から川口政宏が移る[30]。さらに，平成10年の改組により，学校教育教員養成課程，実践臨床教育課程，情報科学教育課程，健康科学教育課程，総合文化教育課程の５課程が設置され，総合文化教育課程文芸・芸能コースに菊屋吉生が移る[31]。学部に関しては所属の変更が一部あるものの，大学院に関しては変更はない。教科教育二人体制も維持されたまま現在に至る。

４．結論

山口大学の美術教育学の制度的基盤の成立過程（人的制度の成立と人的配置）を以下のように明らかにした。

1. 山口師範学校から山口大学教育学部への移行期：美術科教育を専門とする教官はいなかった。当然ながら，制度的に美術科教育の専門性は保証されておらず，「美術教育学」も認識されていなかった。
2. 学科目の設置と具体的人員の配置：学科目制度発足以前から多様な分野を担当していた森本宏が，昭和45年に美術科教育の学科目に移ることとなった。さらに昭和54年には武市勝が美術科教育の学科目で採用された。森本の担当移動と武市の赴任により，制度上は美術科教育の人的整備は確定された。
3. 教科教育専攻大学院の設置と展開：昭和62年に岡田匡史，昭和63年に福田隆眞が赴任し，美術科教育を専門とする教官が二名揃い，平成３年に教科教育専攻大学院が設置された。山口大学の場合，この時期，美術教育学の制度的な基盤が成立したと言える。

以上のように，山口大学における美術科教育学の制度的基盤は成立したと結論する。

謝辞

調査にあたってご協力いただいた山口大学教育学部教授福田隆眞先生，諸氏に厚く御礼申し上げます。

付記

本稿は，本学における平成23年度「若手教員に対する支援」による研究成果の一部である。

註

１）有田洋子「美術教育学の制度的基盤の成立過程―島根大学における人的制度と配置―」『島根大学教育学部紀要（教育科学）』第45巻，平成23年，47-55頁。金子一夫・有田洋子「美術教育学の制度的基盤の成立過程―東京芸術大学の場合―」『茨城大学教育学部紀要（教育科学）』第62号，平成25年，123-135頁。

２）次の資料を参照して表を作成した。山口大学30年史編集委員会『山口大学30年史』山口大学，昭和57年，362-365，366-369，422-424頁。山口大学 50年史編集委員会『山口大学50周年記念誌』山口大学，平成11年，212-213，217-218，233，253頁。山口県教育会『山口県学事関係職員録』大正15-昭和19年度版。山口教職員組合『山口県教職員録』昭和23-平成15年度版。山口大学『山口大学職員録』山口大学，昭和26-平成15年度版。昭和5年度から平成15年度にかけて年度ごとの職員録や名簿を確認することを原則としたが，昭和20-22年度のものだけは確認できなかった。

さらに次の資料を参照して補正した。山口県師範学校同窓会『会報 第26号 輿水先生追悼号』山口県師範学校同窓会，昭和16年所収「客員名簿」。山口大学教育学部同窓会『山口大学教育学部同窓会誌』昭和38・58・62・平成4年版各所収「客員名簿」。山口大学教育学部同窓会『同窓会名簿』山口大学教育学部同窓会,平成９年所収「客員名簿」。

次の８名の就退任年月に関しては，山口大学教育学部同窓会『同窓会名簿』所収「客員名簿」の記載を，山口大学の教示による年月に修正した。森本宏の退任:昭和55年３月→昭和55年４月。友近琢男の退任:昭和54年３月→昭和54年４月。伊藤釣の退任：昭和50年３月→昭和49年11月。細田育宏の就任：昭和37年４月→昭和37年６月。吉賀將夫の就任：昭和46年４月→昭和46年９月。横山省三の就任：昭和47年4月→昭和46年9月。川口政宏の就任：昭和50年４月→昭和50年１月。武市勝の退任：昭和61年12月→昭和61年11月。

なお，表には反映しないが，山口県師範学校及び山口師範学校の在職者についてわかったこと及び上記の資料以外で参照したものを以下に記しておく。

・波多野勝好（明治28-昭和21）は，山口県宇部の出身で，学内外で活躍した美術教育者であり,師範学校の授業は情熱的な美術講義が多かったという話が残される（細田実「情熱の美術教育者 波多野勝好先生を憶う」昭四会記念誌編集委員会『昭和四年三月 山口県師範学校卒業五十周年記念誌「光被」』山口兼師範学校昭四会,昭和53年，20頁）。著書に『小学図画教授細案 児童図画生活を基調とせる図画教授細案』（大同印刷舎出版部，昭和６年）がある。昭和19年山口師範学校勇退後，日発株式会社に就職したが，戦後まもなく事故で他界した（田口克己「二部担任 波多野勝好先生」

鴻友会『昭和十四年三月山口県師範学校卒業同期会記念誌 青史』鴻友会，昭和58年，11頁)。波多野の在職期間は，鴻友会，前掲書，87頁を参照した。

・田村伝次が文検出身の手工教員であったことと没年は，細田実「田村伝次先生を想う」昭四会記念誌編集委員会，前掲書，17頁を参照した。それによると折り紙を教えていたこともあるようである。

・小野信治郎は，大正8年より前から大正9年頃まで愛知県成章中学校，大正11年より前から大正14年頃まで島根県杵築中学（後の大社中学）に勤務する。山口県女子師範学校を昭和16年春勇退後，同年11月19日他界。本籍地は滋賀県（山口大学教育学部同窓会『同窓会名簿』山口大学教育学部同窓会，平成９年所収「客員名簿」)。

・宮脇憲三(大正４-昭和39)は兵庫県姫路市に生まれ，昭和26年光風会会員，昭和31年日展特選となる(岩瀬行雄・油井一人『20世紀物故洋画家事典』美術年鑑社，293頁)。その後，関東で教職と画業を続ける。近年，千葉県立佐倉高等学校で油彩画が見つかった。田辺茂一の本の装丁等も手がけた。

・國澤和衛(明治35-昭和58)は，山口県防府市に生まれ，昭和11年から猪熊弦一郎に師事,同年の文展初入選を皮切りに各展で活躍する（日外アソシエーツ『山口県人物・人材情報リスト 2013』日外アソシエーツ，平成24年，619頁)。帝展，新文展，日展に入選，カンヌ国際展にも出品した（岩瀬行雄・油井一人，前掲書，103頁)。文検に合格し，昭和10年から12年３月まで岡山県の天城中学校，昭和15年３月から防府中学校に勤務した。

・小林富蔵(生年不明-昭和59)は（昭和49年に一水会会員となった（岩瀬行雄・油井一人，前掲書，123頁)。本籍地は鳥取県（山口大学教育学部同窓会，前掲書)。

・原田康一は，昭和24年６月より昭和35年４月まで山口大学教育学部に在職する（山口大学30年史編集委員会，前掲書，368頁)。彫塑塾出身らしいが，講座は職業技術に所属した。

・細田育宏(昭和６-平成21)の就任時期は，(細田和子『木工美術 細田育宏の世界』平成22年所収「功績調書 細田育宏」）にも昭和37年６月とある。

3）山口大学及び山口大学教育学部に関する基礎的事項は,次のものを参照した。山口大学事務局総務課『山口大学一覧（自昭和24年度-昭和28年度)』山口大学,昭和29年。山口大学30年史編集委員会，前掲書。山口大学 50年史編集委員会，前掲書。

4）山口大学30年史編集委員会，前掲書，322頁を参照した。それによると，まず昭和23年１月17日県知事を本部長とする山口大学設立期成会，同年２月21全県会議員で構成される山口大学設置対策会議，同年11月に母胎となる学校関係者で構成される山口大学実施準備委員会（委員長:山口高校校長，副委員長:山口経専校長，委員：山口師範学校校長・山口青年師範学校校長等）が順次できていった。

5）山口大学30年史編集委員会,前掲書，322頁。

6）山口大学において美術講座は「図画工作科」の名称で発足する（山口大学30年史編集員会，前掲書，362頁)。

7）昭和十八年山口師範学校卒業生一八会『祝米寿 徳光正亮先生作品集』昭和十八年山口師範学校卒業生一八会,昭和61年所収「徳光正亮先生の履歴」参照。なお徳光の山口大学退官年月は，同書のみ昭和47年２月と示す。これ以外の本稿に挙げた資料では昭和47年３月となっている。

8）中田に関しては２）で挙げた資料を参照した。

9）細田実「田村伝次先生を想う」，前掲書。

10）やまぐち県民文化祭実行委員会『第６回やまぐち県文化祭 山口県文化特別功労賞創設記念 ふるさとのアーティストたち―山口県芸術文化関係表彰の歩みと作品―』平成14年，38頁。

11）同上，38頁。

12）安野は山口県徳山市(現周南市)内小学校代用教員の頃，教職課程の単位を取るため山口師範学校研究科に通う。その時の図画教師が勝見謙信であった。安野によれば，最初の授業で安野が描いたデッサンを見た勝見は「お前はもう教室に来(こ)んでいい。勝手に絵を描いて見せに来い」と述べたらしく，おかげで授業は出なくて済み，代わりに毎晩，囲碁好きの勝見の家に行き，一緒に碁を打っていたと言う。このように勝見から直接の指導は無かったが，安野は教室に飾ってあった勝見の石膏デッサンを手本とし「無言の教育」を受けたと言う。(安野光雅「デッサン画 無言の教育」『読売新聞』平成25年５月16日付朝刊掲載)。

13）森本の没年は,山口大学 50年史編集委員会,前掲書,1086頁を参照した。

14）金子一夫「大正・昭和戦前期全国中等学校図画教員の総覧的研究(1)－直轄諸学校－」『茨城大学教育学部紀要(教育科学)』61号，平成24年，43 -58頁 。

15）山口教職員組合『山口県教職員録』を参照した。なお昭和23年は「書工」，昭和24年は「工」，昭和24年は「工作書道」とあった。

16）三好の経歴に関しては，山口県立美術館・朝日新聞社事業本部西部企画事業部『没後30年 香月泰男展図録』平成16年，167頁及び中西輝磨『昭和山口県人物誌』マツノ書店，平成２年，270頁を参照した。なお美校卒業後からであるが，同郷同門の三好と香月は親交があった。

17）山口大学教育学部昭和29年卒業生で画家の戸野昭治郎の回想で，卒業生送別会に三好も同席し，山口大学学生から先生と慕われる様子が示される（戸野昭

治郎「先生の裸」三好正直先生を偲ぶ会『三好正直先生を偲ぶ』平成９年，10頁）。ちょうど三好が山口大学教育学部非常勤講師を担っていた時期と思われる。戦後の若手作家達による山口新美術協会の顧問に友近と共になる（三好正直先生を偲ぶ会，前掲書）。「三好正直先生を偲ぶ会」世話人も友近や服部である。また，山口芸術短期大学では，山口大学赴任以前の吉賀將夫が講師，その父吉賀寿男（号大眉）が教授で同僚であった。そして山口大学定年退官後の友近が教授で赴任，一部の山口大学教官の非常勤講師での勤務等もあった。

18）梶進『おきゃん繚乱 梶進 女人画の世界』昭和58年，168-169頁。

19）松田正平の在職期間に関しては諸説ある。昭和17年１月-昭和18年３月（山口県立美術館『松田正平展』山口県立美術館，昭和62年所収「年譜」。松田正平『松田正平文集 風の吹くまま』求龍堂，平成16年所収「松田正平年譜」。山口県立美術館・神奈川県立近代美術館『生誕100年 松田正平展』山口県立美術館・神奈川県立近代美術館，平成25年所収「松田正平年譜」。山口県立美術館『松田正平の世界 図録』山口県立美術館，平成11年所収「松田正平 年表」）。昭和17年１月-昭和？年３月（山口大学教育学部同窓会『山口大学教育学部同窓会誌』昭和62年）。１学期で退職（日外アソシエーツ，前掲書，631頁）。波多野の委嘱を受けての赴任であったらしい（山口県立美術館，前掲書，124頁）。松田正平の山口師範学校教官の頃のエピソードを当時の教え子の直野進が記している。それによると世情は急迫し，学校に配属将校が教官として配置されるなどした状況の昭和17年に松田が着任する。当時の学校の様子からしてなんとなく場違いな感じのする先生だったらしい。直野は授業を直接受けていないが，はっきりしているのは「絵を教えるなんてとても出来ない」と，１年で学校をやめたことと言う。美術教室の廊下に松田の絵が二枚掲示されていたことがあったらしい（直野進「山口師範教師のころ 師範学校と松田正平先生」山口県立美術館，前掲書，106-108頁）。本稿の表１では，松田が存命の頃の展覧会図録所収の年譜に示された昭和17年１月-昭和18年３月をとりあえず採用しておく。

20）下瀬の経歴に関しては，日外アソシエーツ，前掲書，607頁を参照した。

21）山口大学30年史編集委員会，前掲書，326，367，423頁。

22）徳光正亮「移行期における図画工作教育」『研究論叢 開学10周年記念号－教職・芸能・体育・職業・家庭－』第９巻，第３部，昭和34年，17-30頁。

23）「国立大学の学科及び課程並びに講座及び学科目に関する省令」及び同省令の一部を改正する省令に関しては，現代日本教育制度史料編集委員会『現代日本教育制度史料25』東京法令出版，昭和62年，286-457頁及び511-688頁を参照した。

24）現代日本教育制度史料編集委員会，前掲書，423,652頁。

25）山口教職員組合『山口県教職員録』参照。

26）山口大学50年史編集委員会，前掲書，212頁。

27）同上，212頁。

28）同上，212頁。

29）同上，212頁。

30）同上，217-218頁。

31）同上，260-262頁。